



富洲原の魅力 再発見 マップ

富洲原地区
三大祭

**聖武天皇社
松原石取祭**

7月の「海の日」の前の金曜日～日曜日

聖武天皇の行幸に由来する賑やかで勇壮なお祭りです。金曜日夜8時の叩き出しから、土曜日の町練りを経て、日曜日の本楽では夜7時半に6台の祭車がイオンモール四日市北店に集合します。土日は松原公園に屋台が出ます。

富洲原地区
三大祭

**富田一色
大念仏行事** (飛鳥神社)

8月14日～15日

鎌倉時代、非業の死を遂げた佐原豊前守の怨霊を鎮めるため、満月上人が民衆とともに鉦を叩き練行することに由来します。大鉦を鳴らし飛鳥神社に入ろうとする宮守と、太鼓を叩き防ごうとする氏子たちが激しくもみ合う勇壮なお祭りです。初日は盆踊りも催されます。

富洲原地区
三大祭

住吉神社石取祭礼

8月14日～15日

江戸時代、疫病を鎮めるため自ら進んで人柱に立つことを申し出た二人の娘「しな」と「こま」の心中を思いやった村人たちが、鉦や太鼓で賑やかに道中を練り歩いたとの言い伝えに由来します。昭和33年(1958年)までは、秋祭りに石取り、盆には練り行事を行っていましたが、近年は盆の石取り祭りだけとなりました。

松原 16 ふしぎざんめんじ
不思議山延命寺

地蔵菩薩を本尊に、昭和27年(1952年)3月に建立されました。開山智宏尼は、幼少より長年病床に伏していましたが、浅からぬ仏緣により奇跡的に回復を得ました。この事実を聞き多くの人が訪ね来るようになる中、「この地蔵を祀ってほしい」とのお告げで地蔵菩薩像が刻され、多くの門徒からの強い願いを受け建立され今日に至ります。この地蔵菩薩は「ふしぎ地蔵」と呼ばれるようになりました。

富洲原地区の年間行事

1月
どんど(富田一色、松原、天力須賀)、消防出初式

2月
節分

3月
北部ブロック駅伝大会、保・幼・小・中の卒園式・卒業式

4月
花まつり(富田一色)、保・幼・小・中の入園式・入学式

5月
グラウンドゴルフ大会

6月
人権地区懇談会

7月
夏まつりin 富洲原、聖武天皇社石取祭(松原)

8月
大念仏行事 けんか祭り(富田一色)、住吉神社石取祭礼(天力須賀)

9月
伊勢湾台風殉難者慰霊献花式、敬老会、小学校創立周年記念式典

10月
とみすはら大運動会、秋の祭礼(天力須賀)、ふれあいウォークラリー大会、がに祭り(富田一色)

11月
富洲原地区文化祭、富洲原地区総合防災訓練、グラウンドゴルフ大会

12月
仕事納め、大晦日

富田一色 1 あすかじんじや
飛鳥神社

弘仁2年(811年)8月13日に、一色の浜に流れ着いた社殿を住民が引き揚げ、現在の境内に安置し八重事代主命を祀ったのが始まりと伝えられています。同日、浜神楽を行い大漁を祈禱して以来、その日を例祭とし土俗飛鳥大明神と尊称して住民から崇敬されてきました。(現在は、新暦8月15日を例祭とします。)明治6年(1873年)3月、村社に列せられ、同40年(1907年)11月8日無格社厳島神社厳島姫命を合祀し飛鳥神社と称するようになりました。

富田一色 2 いっしきざんかんじょうじ
一色山観浄寺

天平14年(742年)8月18日、森田左衛門政時が海中から引き揚げた千手観音像を本尊とし、政時は入道して勤浄と号したため、観浄寺と呼ばれるようになりました。弘仁元年(810年)の火災で当寺は炎上し本尊も焼失しました。弘仁8年(817年)7月14日、空海がこの地を訪れた際、千手観音像を作り(現存せず)、本堂と鎮守の明神社を再建したと伝えられますが、その後、幾多の興廃を経て、現在は真宗高田派に属し観浄教会となり、本尊の千手観音像(室町時代の作と推定)のほか弁財天が祀られています。

富田一色 3 しゅうおうざんりゅうせんじ
珠王山龍泉寺

開基は景可で、文禄3年(1594年)羽津城山にあった真言宗の西光坊を富田一色に移し、本山の許しを得て高田派末寺として建立されました。後に、寺号が流泉寺、更に珠王山龍泉寺と改められました。本尊の阿弥陀如来像は鎌倉時代の作といわれ、高さ36.9cmの木造仏で胎内には経巻が内蔵されていました。平成16年10月18日、三重県の有形文化財に指定されました。

富田一色 4 へいじろうぼうし
平治郎橋

明治の半ば頃まで、地区の人々には、富田一色から富田駅へ向かうには北に位置する海運橋を渡っていく方法しかなかったのが、非常に不便でした。そこで、実業家であり篤志家である伊藤平治郎氏が私財を投じ明治41年(1908年)に新たな橋を完成させました。同氏の偉業を称え「平治郎橋」と名付けられ、現在の橋は三代目になります。

富田一色 6 かいりょうばし
海運橋

古来、富田一色は、東に海、西は運河で、海運橋を唯一の出入口とした「出島」状態でした。この橋が架けられた宝暦6年(1756年)頃、当時の八風街道は、起点となる富田一色から海運橋を経て小牧(保々)までの整備が行われていたようです。その後、明治27年(1894年)、昭和7年(1932年)、昭和11年(1936年)と架け替えや改修を経て現在に至ります。桑名の時雨蛤、富田の焼蛤で有名な蛤は、富洲原の須賀浦で採れ、海運橋を用いて流通されていたようです。海運橋は、富田一色が湊を拠点に海運業で栄えた歴史を見守ってきました。

富田一色 7 ひろくわち
広小路

富田一色は、寛永16年(1639年)の大火で壊滅的な被害に見舞われたと伝えられており、その後、計画的な再建計画のもと、当時の東海道の数倍もの道幅を有する広小路を設け防火機能を持たせ、それを中心に町割りが行われたようです。当時、この地域は山ノ神町と呼ばれていましたが、明和7年(1770年)から広小路町という名称になりました。

富田一色 8 四日市市漁業協同組合富洲原支所
せんぎょしじょう
とみす鮮魚市場

平成10年開設。伊勢湾でとれた旬の魚介類をどなたでも安価で購入することができます。毎週木曜日と日曜日の午前11時30分から12時頃まで開設(※中止の場合あり)

松原 9 りょうふうざんだいしんじ
涼風山大信寺

かつては、当地に住む東本願寺派の門徒は少なく、手次の寺は遠隔のため、昭和11年(1936年)に地区の方々の尽力により「富洲原説教場」として創建され、昭和22年(1947年)に「大信寺」として認可を受け今日に至っています。歴史の新しい2代目の真宗大谷派寺院です。

松原 11 しゅうむてんのうしや
聖武天皇社

聖武天皇が、天平12年(740年)に、松原の地に立ち寄られた機縁で、後世の人が安貞元年(1227年)に神社を創建し、産土神(うぶすながみ)として天皇をお祀りしたと伝えられています。以来、地元の人々からは「天皇さん」と呼ばれ親しまれています。昭和30年(1955年)、地元氏子は、聖武天皇崩御千二百年を記念して、天皇が詠まれた「妹に恋ひ吾の松原見渡せば、潮干の瀧に田鶴鳴き渡る(万葉集)」の歌碑を神社境内に建立しました。文字は、著名な万葉学者であり歌人の佐々木信綱氏によるものです。

松原 12 まつばらしょうかい あみたどう
松原教会 阿弥陀堂

以前は、菩提山教禅寺と称していましたが、松原の阿弥陀堂と呼ばれ住民に親しまれるようになりました。現在は真宗高田派に属し、本山には松原教会として登録されています。現在の本堂は明治22年(1889年)に建てられたもので、当時の住職が考案した茶室が残っています。本尊は、行基大師が作った1尺3寸の阿弥陀如来像で、当初は真言宗の寺院であったと伝わっています。

松原 13 あか
赤レンガ群
(旧東洋紡績富田工場・原綿倉庫)

この赤煉瓦の建造物は、大正6年(1917年)に創業した東洋紡績富田工場の敷地内に建てられていた原綿を保管する倉庫跡です。工場の移転後も、大正期の貴重な建造物として保管されており、平成12年4月28日に登録有形文化財に指定されました。

天力須賀 14 やまぐちせいせい くひ
山口誓子の句碑

明治34年(1901年)11月3日京都に生まれた山口誓子(本名は山口新比古)は、大正5年(1916年)に東大俳句会を結成し、大正7年(1918年)には「ホトトギス」同人となり、新興俳句運動を推進し、近代的素材の摂取消化に努め、多くの影響を後進に及ぼしました。昭和21年(1946年)から2年間、病氣療養のため天力須賀の地(須賀浦海岸の別荘)に滞在していました。その後、昭和40年(1965年)になりこの地で読んだ「かの雪嶺 信濃の國の 遠さもて」の句碑が天力須賀2丁目市川宅前に残っています。

天力須賀 17 すみよしじんじや
住吉神社

古くから弁財天を祀っていましたが、宝暦9年(1759年)までは社壇もなく、その後、船仲間が大阪から住吉大明神を請い受け、新しく神殿を造って祀ったといわれます。住吉大明神は航海守護の神で、社前の石を持って船に乗れば船酔いしないと伝わります。明治40年(1907年)、港町にあった山の神(大山祇命)を合祀しています。現在、境内には昭和10年(1935年)頃掘り出された延命地蔵が祀られています。また、太平洋戦争の戦没者を祀る護国社が本殿左手にあります。

天力須賀 18 ほうしょうざんみょうがんじ
宝照山明願寺

現在の本堂は、もと富田一色の龍泉寺の建物で、嘉永年間、龍泉寺の本堂改築に伴い移築されたものです。元禄9年(1696年)に建立され、寺院建築として大変貴重で、堂内正面の欄間の龍の彫刻は、江戸初期の特徴をよく現した秀作と評価されます。山号及び寺号は、明治17年(1884年)垂坂村の真宗本願寺派「宝照山明願寺」を譲り受けたものです。銀杏の木の下の力石は、以前は現在の天力須賀公会堂近くにあり、かつてはこの石で男たちが力自慢を競ったと伝えられています。